

## 研究論文 (Articles)

# 親からの期待が大学生の自尊感情に与える影響

——子どもの期待に対する反応様式に注目して——

春日 秀 朗・宇 都 宮 博

(立命館大学大学院文学研究科・立命館大学文学部)

## The Effect of Parental Expectation on University Student's Self-Esteem : Focusing on Children's Reaction

KASUGA Hideaki and UTSUNOMIYA Hiroshi

(Graduate School of Letters, Ritsumeikan University/College of Letters, Ritsumeikan University)

The purpose of this study is to examine the relationship between parental expectations, children's reactions, and the self-esteem of university students. To examine these relationships, appropriate scales to measure the degree of parental expectations, children's emotions, reactions to expectations and affirmative emotions for reaction were created. Using these scales and Self-Esteem Scale, the influence of parental expectations, students' emotion and reactions on self-esteem were evaluated using 285 students. This analysis revealed that the influence of parental expectations on students' reactions and self-esteem differed based on the type of the parental expectation. Interestingly, students feel the degree of expectations from mothers higher than those of fathers, and their emotions and reactions to the expectations from mothers were slightly higher than to those of fathers. Students' positive emotions and reactions to mothers' expectations were found to enhance self-esteem, whereas the expectations of fathers' had no detectable influence. In conclusion, our examination of the influence of parental expectation on children attending university revealed the importance of the degree and the type of parental expectations, particularly those stemming from mother's humanity and education/employment expectations, on students' reactions and the formation of self-esteem.

**Key Words** : parental expectation, reaction, Self-Esteem, university students

キーワード : 親からの期待, 反応様式, 自尊感情, 大学生

### I. 問題と目的

親は様々な願望を、期待という形で子どもに抱く。子どもの幸せを願い、「健やかに育って

ほしい」、「勉強を頑張ってよい学校に入ってほしい」、「友達に恵まれてほしい」などや、親自身の理由により「言う事を聞いてほしい」などが挙げられるだろう。また、教育者としての立場から「このような人間に育てたい」と教育目

標を立て、その通りに子どもが成長する事を期待する。そうした親の期待や願いが子どもを取り巻く環境を作り、その環境が子どもの発達に影響を与える（柏木、1990）。

子どもにとって親の期待は、時には励ましとなり、発達を援助する。また時には重圧となり、子どもが非行行動を引き起こす要因にもなる。また、期待がまったく無いと「張り合い」や「見守り」といったものをなくし、発達に悪影響を与える可能性もある。

児童期を過ぎ青年期に入ると心理的離乳を向かえ、子どもは親から精神的に自立しようとし、必然的に親との距離は大きくなり、親からの影響は相対的に少なくなる（柏木、1974；佐々木、1995）。期待に関して言えば、遠山（2006）によると、期待に応えるか否かを判断するとき、小学生の場合は親子関係の良し悪しが影響するが、中学生の場合は親との仲の良し悪しの影響は弱くなり、「自分に利益があるか否か」が重視されるという。

その一方で、高校生以降の青年に対しても親の期待は影響を与え続ける。Majoribanks（1997）は親の志望や支援が大学生の教育とキャリアに関する志望に関係していることを示している。日本でも、河村（2003）の研究において、親の期待を高く認知している高校生は完全主義傾向が高いという形で、仲野・桜本（2000）は大学生のアイデンティティ形成及び自尊心に、小川・田中（1980）の研究では親の職業継承期待と大学生の職業選択という形で現れているように、養育者、教育者としての親の期待は青年期の子どもの性格、進路などに影響を与える。

以上に述べたように、親の期待は子どもに様々な影響を与える。子どもはその振る舞いや、学業やスポーツで結果を残すことを期待されていると考え、それを全身で感じ取り、時には推測する。斉藤（1996）は、親たちは無意識のう

ちに、世間の基準および期待に沿って生きることを子ども達に強制していると指摘している。子どもたちの中には、そうして感じた親の期待に一生懸命添うことばかりにエネルギーを注いで、自分の目標どころか、自分が何をしたいのかに目を向けることさえおぼつかないこともある子どももいる（小佐野、2004）。そのような親子関係は、高校生、大学生といった青年期後期に問題が生じる要因になりうる。

スチューデントアパシーの高い青年の家庭では、主に情緒的な関りを欠いた統制的な養育態度とともに、親の学歴偏重の過剰期待と言う特徴が挙げられる（築田、2000）。築田はこのような親子関係の中、子どもが親の期待に応え続け、「これ以上応えることができない」と言う状態になって息切れ（葛藤）を起し、アパシーの発症に至るのではないかと指摘している。また富澤（2005）は、親の期待を強く感じるほど、大学生が受ける負担感は増大すると指摘している。

以上の事から、親の期待は青年の精神的健康を損なう要因になり得ると考えられる。Rosenberg（1965）によると、青年の自尊感情には親との関係が重要であり、親から関心を受けられることが自尊感情を高めることにつながるという。またOishi & Sullivan（2005）は、大学生の、親の期待の期待満足度認知が自尊感情を高めることを示したように、親の期待が自尊感情を高めることが示唆されている。その一方で、佐藤（2002）は、親の過度に高い要求水準やストレスを与える養育態度は大学生の自尊感情を低める要因となると述べており、親の期待が青年の自尊感情を低めることも示されている。

先行研究の多くは、子どもへの影響の要因として、子どもが親の期待をどの程度感じていたか、ということに注目したものが多い。確かに親の期待を強く感じるほど子どもへの影響は大

きなものとなると考えられる。しかし、河村（2002）の研究では、同じ「期待に応えた」というものでも、その理由には期待される事を嬉しく思い、喜んで応えたものと、期待を否定的に捉えながらも結果的に期待に応えることとなったものがあった。児童期以降、親子間の心理的距離は大きくなるのなら、親の期待と同時に、子ども自身が期待に対してどの様に感じたのか、という評価や、期待に対してとった行動も重要であると考ええる。

以上のことから、本研究では、大学生の過去に感じた期待と現在の自尊感情との関係を、親の期待を感じた程度だけではなく、期待に対して抱いた感情やとった行動、行動の評価といった反応様式を用いて明らかにすることを目的とした。

## II. 予備調査

### 1. 目的

大学生が過去に感じた親の期待、期待に対して抱いた感情や実際に起こした行動、その行動をいま現在の様に考えているのか、ということを探るための質問項目を作成することを目的とした。

### 2. 方法

**調査対象** 大学生50名(男性21名, 女性29名)に回答してもらった。平均年齢18.8歳 (SD = .92) であった。

**調査時期** 2008年7月上旬に行った。

**質問項目** 著者が独自に作成した期待に関する質問に自由記述で回答してもらった。質問項目は「親からどのような期待をされた、もしくはされていると感じているか」、「その期待を、当時どのように思っていたのか」、「その期待に対してどのような行動をとったのか」、「その行動を、今どのように考えているのか」の4問であった。

**手続き** 授業中に時間をとってもらい、回答してもらった。アンケートに答えることは任意であり、途中で中止しても構わないこと、授業とは関係が無いことを教示として伝え、その場で回収した。

## 3. 結果

自由記述による回答から得られた結果から質問項目を作成した。その際、同義だが異なる表現が使われたものを同一のものとし、また表現が不適切と考えられるものを除外した。これに加え、項目が妥当かどうかの確認を、心理学を専攻している大学院生1名と協議しながら行った。

その手続きを経て、「親の期待」27項目、「期待をどう評価したか」20項目、「期待に対する行動」15項目、「その行動に対する現在の評価」8項目を本調査に使用した。

## III. 本調査

### 1. 目的

大学生に対する親の期待及び期待に対する反応様式が、大学生の自尊感情をどの様に高めるのか明らかにすることを目的とした。河村（2002）に倣い、親の期待を青年が感じ、それに対して感情を抱き行動する、という時系列を想定してモデル（Figure 1）を構成し、検証した。

### 2. 方法

**調査対象** 質問紙が回収できたもののうち、父母両方について回答がされている大学生285名（男性103名, 女性182名）を対象とし、父親もしくは母親の一方のみに回答した7名（男性2名, 女性5名）及び回答に不備があったものを分析対象から除いた。

**調査時期** 2008年10月下旬から11月上旬にかけて調査した。

**手続き** 授業時間を使って質問紙を配布し

た。回答は任意であり、授業の評価とは関係がないこと、途中で回答を中止できることを教示し、回答してもらった後に回収した。また筆者が手渡しで個別に依頼し、了承が得られた場合は回答してもらった。有効回答率は94.4%であった。

### 3. 質問紙

**親の期待に関する質問項目** 大学生が、大学入学までに父母それぞれからどの様な期待をかけられたと感じているか尋ねた。質問項目は、予備調査で得た「人に優しくしてほしい」などの27項目と、河村（2002）が得た項目から「いい学校に行ってほしい」「いい企業に就職してほしい」など7項目を加えた34項目であった。

**期待の評価に関する質問項目** 父母それぞれからの期待について、当時どのように感じたのかを尋ねた。項目内用は「期待されて励みに感じた」など20項目を用いた。

**期待に対してとった行動に関する質問項目** 感じていた期待に対して、どのように振舞ったのかを尋ねた。「期待に応えられるように頑張った」など15項目を用いた。

**期待に対してとった行動への評価に関する質問項目** 感じていた期待に対しての行動を、現在どのように評価しているのかを尋ねた。「後悔はしていない」など8項目であった。

以上の親の期待に関する4つの質問では、大学入学という大きなイベントを経ることで親の期待が変化した可能性を考え、期間を「大学入学までに」とし、過去の期待や自身の感情や行

動を回想してもらい、父母それぞれについて別々に回答してもらった。

**自尊感情尺度** 自尊感情を測定する尺度としてRosenberg（1965）が作成したSelf-Esteem Scaleを山本・松井・山成（1982）が和訳したものの10項目を用いた。

上記の全ての質問項目に対し、「1. 当てはまらない」から「5. 当てはまる」までの5件法で回答してもらった。

## IV. 結果

### 1. 親の期待と子どもの行動、それらの評価の因子分析

用いた質問項目について項目分析を行った結果、いずれの項目にも床効果、天井効果はみられなかったため、全ての項目を分析に用いた。父母それぞれに対して尋ねた質問項目においては、その平均値を算出し、因子分析に用いた。

**期待についての質問項目** 父母からかけられたと感じている期待に関する質問全34項目に対し因子分析（主因子法、Promax回転）を行った（Table 1）。固有値の減衰率と因子の解釈可能性から、2因子構造であると判断した。因子付加量が.40を下回る項目、2つ以上の因子に.40以上の負荷量を持つ項目を削除した。以下、他の項目に対する因子分析においてもこの基準を用いた。第一因子は「人に優しくしてほしい」などからなる18項目で、子どもの性格や人格に対する期待であると考え、「人間性期待」とした。

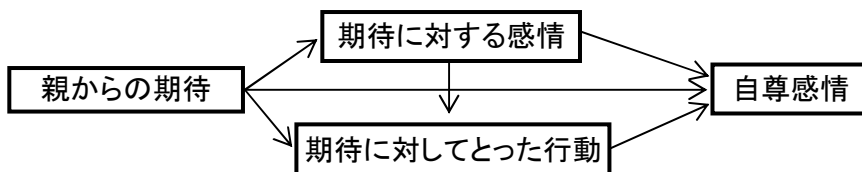


Figure 1 親からの期待が大学生の自尊感情に与える影響のモデル

Table 1 親からの期待についての因子分析

	因子負荷量		共通性
	第1因子	第2因子	
<b>第1因子：人間性期待 (<math>\alpha=.92</math>)</b>			
14.思いやりを持ってほしい	.79	-.12	.61
18.人に優しくしてほしい	.79	-.08	.61
8.よい人間関係を作ってほしい	.77	-.01	.60
7.正直でいてほしい	.73	-.06	.54
22.挨拶が出来る人間になってほしい	.69	.10	.55
30.多くの友人関係を築いてほしい	.68	.04	.51
31.自分の満足のいく生き方をしてほしい	.67	-.07	.41
6.人を外見で判断しない人になってほしい	.65	-.07	.43
10.自分の意見を言える人になってほしい	.64	.02	.45
32.健康に育ってほしい	.63	-.17	.46
28.くじけず、負けない人間になってほしい	.61	.10	.45
19.自分のことは自分で責任を持ってほしい	.60	.08	.43
9.夢を追い続けてほしい	.58	.01	.37
33.自分のやりたい仕事を見つけてほしい	.57	-.12	.35
12.何事にも積極的になってほしい	.57	.19	.46
24.時間を守る人間になってほしい	.57	.03	.37
4.倫理観を持ってほしい	.50	.08	.31
34.良い伴侶を見つけてほしい	.40	.12	.23
<b>第2因子：教育・就職期待 (<math>\alpha=.90</math>)</b>			
21.勉強ができる子であってほしい	-.13	.86	.71
2.いい高校・大学に行ってほしい	-.12	.80	.64
3.いい企業に就職してほしい	-.11	.80	.64
27.良い成績をとってほしい	-.05	.77	.61
13.業績の良いところに就職してほしい	-.08	.67	.49
20.将来のため、しっかり勉強してほしい	.21	.63	.56
29.賢くあってほしい	.16	.63	.52
1.何に関しても一番になってほしい	-.09	.60	.40
15.立派な社会人になってほしい	.35	.52	.54
16.親の言う事をきいてほしい	.05	.51	.33
11.安定した職業についてほしい	.10	.50	.34
固有値		4.66	
因子寄与率 (%)		47.30	
因子相関		.30	

第2因子は「良い成績を取ってほしい」、「いい企業に就職してほしい」などからなる11項目で「教育・就職期待」とした。Cronbachの $\alpha$ 係数は第1因子が.92、第2因子が.90であった。

**期待の評価についての質問項目** 大学生が過去に感じた親の期待を、どのように受け止めたのかについて尋ねた20項目に対し因子分析（主因子法、Promax回転）を行った。因子間相関が見られなかったため、再度Varimax回転で行った（Table 2）。固有値の減衰率と因子の解釈可能性から、2因子構造であると判断した。第1因子は、「期待されてつらかった」など、期

待を重荷、負担としている12項目で「重荷因子」とした。第2因子は「期待されて励みに感じた」などからなる6項目で、期待されることを嬉しく思い、また励みにしていた「励み」因子とした。Cronbachの $\alpha$ 係数は第1因子が.91、第2因子が.89であった。

**期待に対する行動についての質問項目** 期待に対してどのような行動をとったのかを尋ねた15項目に対し因子分析（主因子法、Promax回転）を行った（Table 3）。第1因子は「期待に応えられるよう頑張った」など4項目であり、期待を受容した行動や積極的に応えようとした

Table 2 親からの期待に対する評価についての因子分析

	因子負荷量		共通性
	第1因子	第2因子	
<b>重荷 (<math>\alpha=.91</math>)</b>			
7.期待を重荷だと感じた	.81	.06	.68
16.期待されることを嫌だと感じた	.79	-.03	.66
11.期待されることに疲れた	.78	.06	.64
2.期待されてつらかった	.75	.16	.62
17.期待する親に対して悪い印象を持った	.74	-.09	.59
6.親に自分の何が分かるのか、と思った	.72	-.07	.57
3.期待されることでやる気を失った	.69	-.01	.53
14.放っておいてほしいと思った	.69	-.16	.56
5.自分に口出ししないで欲しいと思った	.69	-.10	.53
18.そんな事言われなくても分かっていると思った	.63	-.03	.45
19.結果を出せなかったらどうしようと不安だった	.50	.38	.45
12.親を見返してやろうと思った	.46	.14	.28
<b>励み (<math>\alpha=.89</math>)</b>			
9.期待されて励みに感じた	-.17	.87	.78
15.期待されることでやる気が出た	-.09	.85	.75
10.期待する親に感謝している	-.12	.74	.63
8.期待に応えられるよう、頑張ろうと思った	.10	.72	.60
20.期待されることで背中を押されるように思った	.04	.71	.58
4.期待されて嬉しいと感じた	-.05	.66	.52
1.期待を裏切ってはいけないと感じた	.29	.49	.40
固有値		4.39	
因子寄与率 (%)		56.90	

Table 3 親からの期待に対する行動

	因子負荷量		共通性
	第1因子	第2因子	
<b>受容・積極型行動 (<math>\alpha=.68</math>)</b>			
3.期待に応えられるよう頑張った	.70	.07	.54
12.喜んで期待に応えた	.62	-.10	.34
11.期待をしている親と話し合った	.57	.03	.35
7.自分なりにできる努力をした	.51	-.10	.22
<b>回避・葛藤型行動 (<math>\alpha=.70</math>)</b>			
4.どうすべきかわからず、悩んでいた	.04	.70	.53
2.期待を無視するような行動をした	-.29	.66	.33
1.期待に応えるために、無理をした	.21	.65	.60
13.気にせず、普通に生活した	.08	.44	.23
固有値		2.92	
因子寄与率 (%)		46.38	
因子相関		.50	

「受容・積極型行動」因子とした。第2因子は「どうすべきか悩んでいた」など4項目からなり、無視したり、期待に応えるか否か葛藤したりした「回避・葛藤型行動」因子とした。Cronbachの $\alpha$ 係数は第1因子が.68、第2因子が.70だった。

**行動に対する評価** 上記と同様に、期待に対

する行動への評価についての質問項目で因子分析を行った (Table 4)。親の期待に対する行動への評価を尋ねた質問項目に因子分析 (主因子法, Promax回転) を行ったところ, 単因子構造と判断した。因子分析の結果, 「満足している」など6項目からなり, 「過去の行動への肯定感因子」とした。Cronbachの $\alpha$ 係数は父親が

Table 4 期待に対してとった行動の評価

過去の行動の肯定感 ( $\alpha=.74$ )	因子負荷量	共通性
3.満足している	.75	.58
5.最良の選択だったと感じている	.60	.38
1.できることならやり直したい*	.58	.35
2.後悔はしていない	.57	.32
8.反省している*	.44	.20
4.正しかったのか、わからない*	.42	.18
固有値	2.01	
累積寄与率	33.47	

\*1, 4, 8は逆転項目

.72, 母親が.74であった。

自尊感情尺度について Self-Esteem Scale に対し確認的因子分析（主因子法）を行った。その結果、「8. 自分自身をもっと尊敬できるようにになりたい」の因子付加量が.40を下回った。またCronbachの $\alpha$ 係数もこの項目を除いたことで高くなったため、阿部・今野（2007）らと同様に、この項目を除く9項目を分析に用いた。

#### 因子の平均値及び分散分析の結果

それぞれの因子の構成する項目の評定値の平均値を、父母ごとに算出し分析に用いた。また、

それらについて男女差、父母差が見られるのか確認するため、子どもの性別（2水準:男性・女性）×親の性別（2水準:父・母）を要因とした分散分析を行った（Table 5）。

性差について、「人間性期待」（ $F(1, 285) = 9.53, p < .01$ ）、「受容・積極型行動」（ $F(1, 285) = 4.22, p < .05$ ）において、男性よりも女性の方が有意に高かった。父母差については、「人間性期待」（ $F(1, 285) = 15.9, p < .001$ ）、「教育・就職期待」（ $F(1, 285) = 60.1, p < .001$ ）の両方とも父親よりも母親からの期待を強く感じていた。期待の評価に関しても「重荷」（ $F(1, 285) = 3.40, p < .10$ ）で有意傾向、「励み」（ $F(1, 285) = 12.4, p < .001$ ）で有意に母親に対するものが高かった。「受容・積極型行動」においても母親に対するものが高かった（ $F(1, 285) = 12.4, p < .001$ ）。また、交互作用がみられたため単純主効果の検定を行ったところ、女性において父母の主効果が見られ、女性において母親からの期待に対して受容・積極型行動が高かった（ $F(1, 285) = 4.16, p < .05$ ）。

Table 5 各因子の項目の平均値及び分散分析の結果

		平均値		男女の主効果 F値(df)	父母の主効果 F値(df)	交互作用 F値(df)
		男性(SD)	女性(SD)			
人間性期待	父親	3.58(.78)	3.83(.63)	9.53*** (1,285)	60.1*** (1,285)	.628 (1,285)
	母親	3.82(.63)	4.02(.56)			
教育・就職期待	父親	3.38(.82)	3.49(.77)	1.44 (1,285)	15.9*** (1,285)	.007 (1,285)
	母親	3.54(.78)	3.65(.79)			
重荷	父親	2.50(.87)	2.53(.92)	.301 (1,285)	3.40+ (1,285)	.670 (1,285)
	母親	2.53(.85)	2.61(.95)			
励み	父親	3.03(.97)	3.11(.86)	1.16 (1,285)	12.4*** (1,285)	1.11 (1,285)
	母親	3.11(1.01)	3.26(.81)			
受容・積極型行動	父親	2.85(.82)	3.00(.89)	4.22* (1,285)	12.4*** (1,285)	4.16* (1,285)
	母親	2.89(.77)	3.16(.86)			
回避・葛藤型行動	父親	2.21(.88)	2.26(.88)	1.36 (1,285)	.250 (1,285)	.042 (1,285)
	母親	2.24(.90)	2.29(.91)			
過去の行動の肯定感	父親	3.40(.87)	3.55(.81)	.731 (1,285)	2.16 (1,285)	.050 (1,285)
	母親	3.38(.84)	3.52(.83)			
自尊感情		3.06(.90)	3.14(.81)	.485 (1,285)		

p+ &lt; .10, \*p &lt; .05, \*\*p &lt; .01, \*\*\*p &lt; .001, N(男性, 女性) = (102, 183)

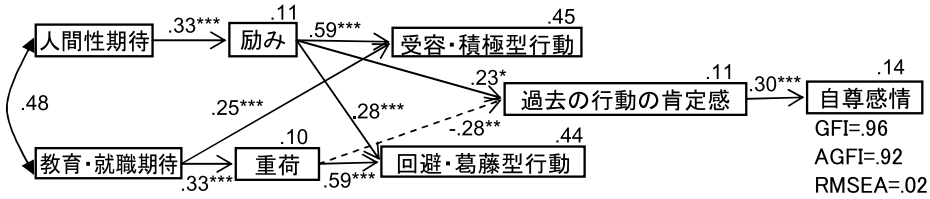


Figure 2 男性の自尊感情に対する母親からの期待の影響 (\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ )

2. パス解析

男性における父母からの期待の影響 大学生が過去に、親の期待を受けてから、どのように行動へと至ったかの構造を検討するとともに、それらの現在の自尊感情への影響を明らかにするため、男女ごとに父母からの期待に関する因子を用いてパス解析を行った。モデル適合度とパスの有意確率から判断した結果、父親からの影響は全てなくなり、母親からの因子のみが残った (Figure 2)。モデル適合度はどの値も高い値をとった (GFI=.96, AGFI=.92, RMSEA=.02)。

その結果、「人間性期待」から「励み」、「教育・就職期待」から「重荷」に正のパスが見られた。「受容・積極型行動」には「励み」と「教育・就職期待」から、「回避・葛藤型行動」には「励み」と「重荷」から正のパスが見られた。過去の行動の肯定感には「励み」から正、「重荷」から負のパスが見られた。自尊感情に対しては過去の行動の肯定感からのみ、正のパスが見られた。

女性における父母からの期待の影響 同様に女性に対する父母からの期待に関する因子のパス

解析を行った (Figure 3)。男性と同様にモデル適合度とパスの有意確率から判断し、父親からの因子が除外され、母親からの因子のみが残った (GFI=.97, AGFI=.92, RMSEA=.04)。

女性でも、「人間性期待」から「励み」へ、「教育・就職期待」から「重荷」へ正のパスが見られたのが、男性とは違い「人間性期待」から「重荷」に負のパスがみられた。受容・積極型行動には「励み」、「人間性期待」、「教育・就職期待」の3つから、「回避・葛藤型行動」には「励み」、「重荷」の2つから正のパスが見られた。「過去の行動の肯定感」には「受容・積極型行動」から正、「回避・葛藤型行動」から負のパスが見られた。自尊感情には「過去の行動の肯定感」、及び「人間性期待」から正のパスが見られた。

V. 考察

1. 因子分析

本研究において事前に想定したとおり、父母ともに「人間性期待」と「教育・就職期待」の2因子構造を示した。期待の因子構造について、

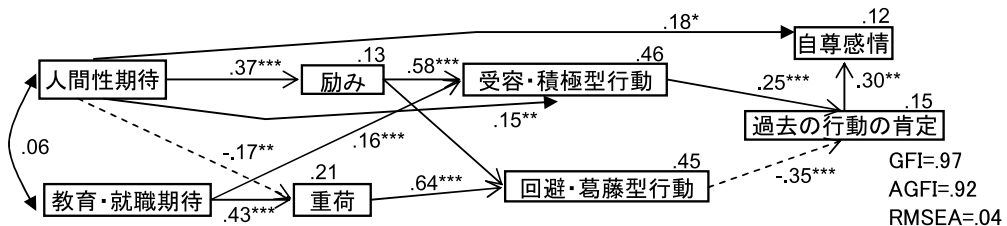


Figure 3 女性の自尊感情に対して母親からの期待が与える影響 (\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ )



大学生を対象に行った研究でも、河村（2003）では「進学・学業」、「社会への適応」、「就職期待」、「従順・見栄」、「苦勞への報い」の5因子、富沢（2005）では「社会的スキルの習得」、「就職・学業期待」、「学校への適応」の3因子というように、研究によりその項目や因子が異なる。このような違いが現れた要因として、質問項目とともに、本研究や富沢（2005）では過去に感じていた期待、河村（2003）では今現在感じている期待を尋ねており、対象者がいつ期待を感じていたのか、という時間的な要因が考えられる。

励みや重荷という評価や、期待に対する行動について、子どもが期待に対して抱く肯定的な側面と否定的な側面が現れており、河村（2002）を追認する結果となった。

## 2. 分散分析

**男女差** 分散分析の結果、「人間性期待」と受容・積極型行動において女性のほうが男性よりも高かった。女性のほうが親との情緒的繋がりが強く（川島・眞榮城・菅原・酒井・伊藤，2008），また親の養育態度からの影響が強い（間島，1986）ためであると考えられる。

**父母差** 2つの期待や、期待に対して抱いた感情、「受容・積極型行動」において、母親に対する得点が父親に対するものよりも高かった。また女性の場合、同性である母親に対してより強い情緒的繋がりを感じ、積極的に期待に応えることが示唆された。

## 3. パス解析

**男女の共通点** 「人間性期待」が「励み」、「教育・就職期待」が「重荷」に正の影響を与えていた。「人間性期待」は一般的な社会的規範に則ったもので、子どもにとって受容しやすく、望ましいと考えられる。反対に「教育・就職期待」はよい成績を残す、よい会社に入るなど、実現することが困難であり、またそのための努力が必要であるために「重荷」と感じると考え

られる。

期待に対してとった行動には、「励み」が「受容・積極型行動」及び「回避・葛藤型行動」に正の影響を与えており、「重荷」が「回避・葛藤型行動」に正の影響を与えていた。「励み」と感じることで期待に応えようとし、「重荷」と感じることで期待に反する、もしくは関係がない行動をとることは自然なことであると考えられる。「励み」が「回避・葛藤型行動」に対して小さいながらも正の影響を与えていることから、たとえ期待自体を喜ばしく感じて、その後の行動を規定するのは子ども自身であることを示唆している。また、期待される事を嬉しく思った場合、自身の意思を優先させるのか、それとも親の期待を優先させるのかという葛藤が生まれることが考えられる。

「教育・就職期待」が「受容・積極型行動」に正の影響を与えていた事に関して、期待そのものは負担となる一方で、期待通りに行動した方が望ましい事は理解しており、行動に移す原動力の一つとなったことが考えられる。以上のように期待に対する行動へ影響を与える要因は様々であり、期待研究において、そのような背景を考慮に入れることが重要である。

期待が自尊感情に与える影響として、「過去の行動の肯定感」が直接正の影響を与えていた。また間接影響を考えると、期待を肯定的に捉えることで自尊感情が高まり、負担であると捉えることで低めると示された。野村・橋本（2006）は過去を肯定的に捉えることで自尊感情が高くなるとしており、本研究の結果は彼らを支持するものである。

**男女差について** 女性において、「人間性期待」が「重荷」に負の影響を与えていた。教育に関する期待はその特性上負担となるが、女性にとって、同性である母親からの期待は励みとなると同時に負担を軽減することが示された。

また、女性では「人間性期待」、「教育・就職

期待」がともに「受容・積極型行動」に正の影響を与えており、男性との違いが見られた。「教育・就職期待」だけではなく「人間性期待」からも「受容・積極型行動」に正の影響が現れたことに関して、間島（1986）が、女性は親の養育態度からの影響が大きく、また親とのずれが少ないと指摘していることから、女性の取ろうとする行動と親の期待との一致度が高いためであると考えられる。また、遠山（2006）は、親子関係が良いほど期待の与える影響が高くなると指摘しており、情緒的なつながりが強い女性は期待に応えようとする傾向が強いと考えられる。本研究においても、女性は男性と比べ、その期待内容が何であれ、応えようとする傾向が見られた。

「過去の行動の肯定感」には、男女で大きな違いが現れた。男性では行動ではなく、その行動の原因となった期待の評価が影響を与えていた。男性は過去の行動に対しての評価を下す時に、その行動そのものではなく、原因となった評価、つまり自身の感情を根拠とすることが示された。「励み」という肯定的な感情に基づく行動の場合、その肯定感は高くなり、反対に「重荷」、負担という否定的な感情に基づく場合はその肯定感が低くなる。

女性では「過去の行動の肯定感」には「受容・積極型行動」から正の、「回避・葛藤型行動」から負の影響が現れた。女性は親との、特に母親との同一化傾向が強く（伊藤，2003）、母親の意に反する行動を否定的に捉えてしまうためと考えられる。

また、男性と同様に自尊感情には過去の行動の肯定感から正の影響を受けているほか、「人間性期待」が自尊感情へ直接の影響を与えていた。女性は「期待されている」と感じることで自身が自尊感情を高める要因になっており、自身の感情や行動だけではなく、男性よりも強く親の期待を意識しているのではないかと考えら

れる。

**父母差** 男女ともに母親からの期待に関する因子のみが残り、父親からの期待に関する因子は削除された。本研究において、男女ともに母親からの期待をより強く感じ、期待に対する反応様式も全体的に母親に対するものが高いことが示された。このことから、大学生が認知した親の期待や自身の反応様式の程度の高低により、影響する対象が変化することが示唆された。

本研究では、大学生の過去の期待認知の程度とともに、期待内容やその評価、行動といった反応様式が現在の自尊感情に影響することを示した。どの様な期待を認知するかでその後の反応様式は異なり、親の期待を肯定的に捉え、応えようと行動することが自尊感情を高めることが明らかになった。期待研究はその多くが期待認知に注目したものであるが、自尊感情への影響に限らず、親の期待から子どもが何を感じ、どの様に行動してきたのかといったように、青年自身に焦点を当てる事が重要であると考えられる。

#### 4. 本研究の問題点

本研究では青年が認知する親の期待を用いたが、その認知にはどの様な要因が影響するかについての調査を行わなかった。父親の影響が現れず、母親の影響のみが現れた要因は、期待を感じる程度だけではなく、情緒的繋がり、コミュニケーションの頻度やその内容、養育態度といった、単なる性差以外の要因も考えられる。今後、少子化が進み、子ども一人当たりに向けられる期待の変化が予想されることから、それらの要因に注目した研究が必要である。

#### 謝 辞

本研究の実施に際して、調査に快く協力していただいた多くの学生の皆様、先生がたに大変お世話になりました。ここに感謝の意を表しま

す。

## 引用文献

- 阿部美帆・今野裕之（2007）状態自尊感情尺度の開発。パーソナリティ研究, 16(1), 36-46.
- 伊藤葉子（2003）中・高校生の親性準備性の発達。日本家政学会誌, 54(10), 801-812.
- 柏木恵子（1974）青年期における性役割観および性役割期待の認知。教育心理学研究, 31, 146-151.
- 柏木恵子（1990）環境としての親の期待。発達, 11(41), 9-17.
- 河村照美（2002）大学生における親からの期待に関する研究——面接・動的家族画をめぐって。家族心理学研究, 16(2), 95-107.
- 河村照美（2003）親からの期待と青年の完全主義傾向との関連。九州大学心理学研究, 4, 101-110.
- 川島亜紀子・眞榮城和美・菅原ますみ・酒井厚・伊藤教子（2008）両親の夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの認知と抑うつとの関連。教育心理学研究, 56(3), 353-363.
- 間島英俊（1986）親子関係に関する心理学的研究（I）：評価における認知的ズレについて。北海道駒澤大学研究紀要, 21, 107-139.
- Majoribanks, K. (1997) Family contexts, immediate settings, and adolescents' aspirations. *Journal of Applied Developmental Psychology*, 18, 119-132.
- 仲野好重・桜本和也（2006）親子関係における期待と青年期のアイデンティティ形成の相互性について。大手前大学社会文化学部論集, 6, 111-126.
- 野村信威・橋本宰（2006）青年期における回想と自我同一性および心理的適応の関連。パーソナリティ研究, 15(1), 20-32.
- 小川一夫・田中宏二（1980）親の職業が娘の職業選択に及ぼす影響に関する研究。教育心理学研究, 28(4), 328-331.
- Oishi, S., & Sullivan, H. W. (2005) The mediating role of parental expectation in culture and well-being. *Journal of Personality*, 73, 1267-1294.
- 小佐野綾（2004）親の期待と子どもの目標がすれるとき。児童心理, 58, 97-106.
- Rosenberg, M. (1965) *Society and the Adolescent Self-Image*. Princeton NJ: Princeton University Press.
- 齊藤学（1996）「アダルト・チルドレンと家族～心の中の子どもを癒す～」。学陽書房。
- 佐藤豪（2002）タイプA行動パターン、自尊感情と両親の養育態度に関する関連性の研究。人文学, 172, 1-15.
- 佐々木正宏（1995）人間関係の発達理論。澤田瑞也（編）「人間関係の発達心理学：1 人間関係の生涯発達」。培風館。
- 庄司知明・藤田尚文（1999）子どもから見た親の期待について——親子関係診断尺度（EICA）との関連から。高知大学教育学部研究報告第2部, 59, 55-68.
- 遠山孝司（2006）小・中学生の親子関係、親からの期待、子どもの目標の関係：親子関係がよいと小・中学生は親の期待に応えようとするのか。名古屋大学教育学部紀要, 53, 37-55.
- 富澤麻美（2005）青年期における親の期待とその負担感に関する研究：大学生・専門学校生を対象に。人間科学研究, 18, p35.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子（1982）認知された自己の諸側面の構造。教育心理学研究, 30(1), 64-68.
- 築田さやか（2000）中学生の意欲と、親の養育態度および期待との関連。日本教育心理学会第42回総会発表論文集, p36.

（2010. 8. 31 受稿）（2010. 11. 16 受理）